

## コリント人への手紙第一 7章 「信仰生活と結婚」

### 1A 夫婦の務め 1-9

1B 性の営み 1-5

2B 独身の賜物 6-9

### 2A 離婚について 10-16

1B 禁じる命令 10-11

2B 不信者の伴侶について 12-16

1C 聖なる家族 12-14

2C 不信者が離れる時 15-16

### 3A 召されたところに留まる勧め 17-24

1B 割礼：神の命令への焦点 17-20

2B 奴隷：主にある自由 21-24

### 4A 未婚の人たち 25-35

1B 差し迫っている危機 25-28

2B 過ぎ去る世の有様 29-31

3B 相手を喜ばす思い煩い 32-35

### 5A 婚約者と寡 36-40

1B 婚約者 36-38

2B 寡 39-40

## 本文

コリント人への手紙第一 7章です。これまで私たちは、パウロが、コリントで起こっている問題について、他の人から聞いてきた問題に対して取り組んできたところを読みました。教会内で派閥が起こっていることは、クロエの家の者がエペソにいるパウロに伝えて、近親相姦を犯している者を教会でそのままにしているということはかなり広範囲に広まっていて、いろいろな伝手で聞いていたことでした。けれども、7章以降は、コリントの教会の人たちがパウロに手紙を書いていて、そこで彼らが話していること、訴えていることに返答する形になっています。これまでは、伝え聞いたことに応答しましたが、ここからは彼ら自身が書いてきたことに応答しています。

それが結婚に関することです。結婚というのは、人生で最も大きな決断の一つです。それゆえに、大きな生活の調整を迫られます。この大きな決断とその後の生活と、信仰との兼ね合いはどうなっているのか？を今回は学ぶことができます。私たちキリスト者にとっては、まず信仰ありきで、イエス様との関係が最も大切な決断です。ですが、結婚という大きな決断と大きな生活があるゆえ、信仰との兼ね合いで、思い煩いにさえなることがあります。このバランスをどう取るべきなの

か？それをこの7章から見ていくことができます。

### 1A 夫婦の務め 1-9

#### 1B 性の営み 1-5

<sup>1</sup> さて、「男が女に触れないのは良いことだ」と、あなたがたが書いてきたことについてですが、<sup>2</sup> 淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。

前回、私たちはコリントの教会の人たちに、遊女のところに通っているという問題をパウロは指摘していました。けれども、今読んだように、正反対の考えの人たちもいたのです。「男が女に触れないのは良いことだ」という禁欲的な考えです。とても混乱していますね。一方では、性欲に任せてやりたい放題で、もう一方は性の営み自体が良くないことだとする考えです。ギリシア人の考えには、この両極端があり、快楽を求め、また禁欲を求めどちらの哲学もありました。

これは、ギリシア人の考え方で霊と肉は別々なのだという二元論から来ていることを前回、話しました。霊や魂、精神についてのことは高尚なことであり、肉体はそもそも悪だという考えです。それが、信じ方にも悪影響を及ぼしました。つまり、神は霊に関わることだけにつながっていて、肉体のこととは、遠く離れておられるという考えなのです。それが行き過ぎて、キリストは肉体を取られたという真理を否定する異端が現れました。その異端と戦った手紙が、ヨハネによる第一の手紙で、以前、教会で平日の学びで学びました。

分かりやすく言えば、愛とか平和、喜びとか、目に見えないことを語り、その知識を持っていることがそのまま霊的なことだと考え、献金であるとか、礼拝に体を運んでくるとか、もっと実際の、具体的なことは、何か世的なもののように見えず傾向があったら、それはギリシア的な考えで、非聖書的です。いいえ、献金は神への聖なる行為であり、また仕事も、主にあって働くならば、聖なる行為です。教会についての具体的な奉仕も、私がこのように説教して、みことばを取り扱っているのと同じように、聖なる行為です。聖書は、肉と霊を密接に結びつけています。

肉体はそもそも悪だという考えを持つと、二つの極端になります。それは、肉体の営みがすべて悪であると考えて避けるということです。そのために、ここの彼らの書いてきた手紙にあったように、結婚を避ける、あるいは結婚しても夫婦の性の営みを避けるという極端になります。今のクリスチャンの女性でさえ、夫とのセックスは汚れわしいとさえ考えている人たちがいると聞いたことがあります。それは、全く間違いであることはパウロがこれから説明することです。もう一つは、肉はもともと悪なのだから、そのまま肉の欲することをして行けばよいという考えです。信仰はもっと見えないことで、肉体で行っていることは関係しないと考えているとできてしまいます。

ですから、実は正反対のようで、考えが同じなのです。おそらく、「男が女に触れないのは良い

ことだ」と言っている人たちの中には、信者の夫婦の間では性生活はせず、性欲の発散は遊女のところへ行く、と言った人たちもいたかもしれません。家の中でごみだらけにするのはよくない、それはごみ箱に捨てて、ごみ収集車に頼めばよいというような考えで、信者の妻には自分の性欲について迷惑をかけないで、遊女で処理してもらえばよいという棲み分けをやっていた可能性は十分にあります。このような考え方がいかに間違っているかは、パウロが前回説明したとおりです。男は、両親から離れて妻と結ばれて、一体となるというのは、神が行われることであり、生めよ、増えよと言われたのも神です。結婚における性の営みを祝福されているのは、神ご自身です。肉体のことと、霊のことをこのように聖書は分けていません。

そこでパウロは、「<sup>2</sup> 淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」と言ったのです。結婚外の性行為はすべて、神の定めたものから逸脱しており、淫らな行為です。その性欲を、あなたがたの伴侶によって満たしなさいというのが聖書の教えなのです。ソロモンが箴言で教えました。遊女に通う男の愚かさを語った後で、息子にはこう教えます。「5:18-19 あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若いときからの妻と喜び樂しめ。19 愛らしい雌鹿、麗しいかもしか。彼女の乳房がいつもあなたを潤すように。あなたはいつも彼女の愛に酔うがよい。」

<sup>3</sup> 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。<sup>4</sup> 妻は自分のからだについて権利を持つてはおらず、それは夫のものです。同じように、夫も自分のからだについて権利を持つてはおらず、それは妻のものです。

結婚における、夫婦における性の務めです。一体になったのですから、自分の体はある意味、自分のものではなくなりました。妻のものにもなりました。あるいは、妻の体は夫のものになりました。前回、自分たちのからだは「1 コリ 6:19 聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。」とありました。今のご時勢、自分の権利ばかりいう風潮が強い中で、「私のことに干渉しないで！」という強い反発が来そうですね。いいえ、自分が愛してやまない神のものになっているのを知ったならば、自分のからだは自分のものではないとして献げるのは容易であるし、自分の愛している夫あるいは妻のためなら、自分の体が自分のものではないと考えるのも容易なはずです。

<sup>5</sup> 互いに相手を拒んではいけません。ただし、祈りに専心するために合意の上でしばらく離れていて、再び一緒になるというのならかまいません。これは、あなたがたの自制力の無さに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑しないようにするためです。

夫婦の性の営みには、時間や労力やいろいろ気にしないといけないところがあります。言い方がよくないですが面倒なところがあります。しかし、それは性欲がなくなったことを意味しません。そ

れで、夫婦の危機というものがあり、夫が性欲を満たすために、妻ではないところで満たそうとするという危機が訪れます。サタンは、そういった危機に付け込んで、罪を犯するようにそそのかすかもしれません。それで、パウロは、祈りに専念するということでしばらく、性活動から離れるということはよいが、あくまでも一時的なものでありなさい、と勧めているのです。

## 2B 独身の賜物 6-9

<sup>6</sup> 以上は譲歩として言っているのであって、命令ではありません。

パウロは、この章において、権威をもって命令であると言っているところもありますが、多くが自分の意見であるとして、抑えているものです。これは、主が命じておられることは、はっきりと命令であると告げますが、そうでないことについては、主から与えられているかもしれないが、そうでないかもしれないとして、自分の意見として話します。これ、大事ですね。私たちも、神のことばであれば確信を持って語るべきですが、そうでなければ、自分の意見だけけれども前置きをしたほうがいいですね。

<sup>7</sup> 私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです。しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。<sup>8</sup> 結婚していない人とやもめに言います。私のようにしていただけるなら、それが良いのです。<sup>9</sup> しかし、自制することができないなら、結婚しなさい。欲情に燃えるより、結婚するほうがよいからです。

実はパウロが、1-5 節で結婚を勧めましたが、それは譲歩であって、個人的には独身を勧めています。まず、彼自身が独身です。彼は、信じる前、キリスト者を処刑することに賛成の票を投じたこと証言しています(使徒 26:10)。彼は、最高法院と訳されている、サンヘドリンの一員であったことが分かります。けれども、ユダヤ教の指導者たちの集まるサンヘドリンでは、その一員になる条件に結婚していることがありました。ユダヤ教では、生めよ、増えよという祝福命令に忠実になるため、結婚していることを要件としていたのです。つまり、彼はかつて結婚をしていて、信仰をもったためユダヤ教の世界から追放され、同時に離婚したことが考えられます。後で彼自身が、信仰のゆえに妻が離れていくなら、そのままにしなさいと勧めています。

なぜ独身を勧めているのかと言いますと、彼がこれから話していきますが、差し迫っている危機を抱いていました。世の終わりも近いとも感じていました。そのような時に主のみこころを選び取り、主を喜ばすならば、独身のほうが専念しやすいからです。パウロは、世界宣教に従事していた人ですが、教会史においても、今も、独身の人、宣教地において、結婚している人や子持ちの人たちにはできない働きができています。もちろん既婚者や子供にいる家族だからこそ、用いられる部分も大きいですが、独身であれば主の働きができないというのは間違いであり、むしろ、もっと多くの働きができるという面があるのです。

けれども大事なのは、「一人ひとり神から与えられた自分の賜物がある」ということです。イエス様もこのことについて言及されたことがあります。独身の賜物がある人は、その通りにしなさいということです。けれども、そうでない人は、その性欲は結婚において祝福されます。コリントの人たちには、性欲は遊女で発散させるという考えがありますが、それこそが神に前で淫らな行いという罪です。ですから、結婚するほうがよいと言っています。

## 2A 離婚について 10-16

パウロは次に、離婚について話します。今、独身のほうが望ましいと言いましたが、それは決して結婚を解消してまでのことではないです。

### 1B 禁じる命令 10-11

<sup>10</sup> すでに結婚した人たちに命じます。命じるのは私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。

<sup>11</sup> もし別れたのなら、再婚せずにいるか、夫と和解するか、どちらかにしなさい。また、夫は妻と離婚してはいけません。

意見ではなく、命令として言っていますね。主ご自身が、弟子たちにお語りになりました。「マル10:6-9 しかし、創造のはじめから、神は彼らを男と女に造られました。7『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、8 ふたりは一体となる』のです。ですから、彼らはもはやふたりではなく、一体なのです。9 こういうわけで、神が結び合わせたものを、人が引き離してはなりません。」ここですね、神が結び合わせたということです。ですから、離婚をするということは、もう一体になっている者たちを引き離すことであり、相当の傷が付きます。マラキ書では、主は、「妻を憎んで離婚するなら、..暴虐がその者の衣をおおう。」と言われていています(2:16)。また、結婚について、「その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。」とも言われています(2:15)。一体であることの証しは、二人の間のできた子供です。子どもが離婚において、本人たち以上に傷が付きます。イエス様が語られた時も、その離婚をしてはいけないという命令の次に、子供を祝福しているイエス様の姿があります(10:13-16)。このことをわきまえて、安易な離婚は禁じられています。

## 2B 不信者の伴侶について 12-16

では、夫婦の中で一方が信仰を持ち、相手がまだ信じていないという時はどうなるでしょうか？パウロは自分の意見として次のように述べます。

### 1C 聖なる家族 12-14

<sup>12</sup> そのほかの人々に言います。これを言うのは主ではなく私です。信者である夫に信者でない妻がいて、その妻と一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。<sup>13</sup> また、女の人に信者でない夫がいて、その夫と一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

<sup>14</sup> なぜなら、信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である

夫によって聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れていることになりますが、実際には聖なるものです。

信じている者とそうでない人が結婚しているということで、聖なる者とされたのに、そうでない人と交わっているということで、その結婚は無効なのか？という心配が出てくるかもしれません。しかし、パウロは決してそんなことはないと否定しています。結婚した時には信仰を持っていないとも、片方が信仰を持ったという経緯は、神がよしとしてくださっているのです。そして、自分の信仰のゆえに、妻あるいは夫も、また子どもも、神によるものなのだということです。これは、とても慰めになりますね。二人が信仰を持っていてそれで結婚していることがどれほどよいことか、と、未信者の妻あるいは夫を持つ人は思いますね。自分の信仰のゆえに葛藤が生まれているならば、なおさらのことです。しかし、そのような理想とは思えない状況にあっても、それでもそこで主の大いなるみこころがあるのです。

#### 2C 不信者が離れる時 15-16

<sup>15</sup> しかし、信者でないほうの者が離れて行くな、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとして、あなたがたを召されたのです。<sup>16</sup> 妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうして分かりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうして分かりますか。

信者と信者でない人との結婚は、価値観が根本的に違うことから、葛藤が常にあります。これはしかたがないことですが、今、見たように神がその結婚を聖なるものとしてくださっています。しかし、その葛藤があまりにも激しくなり、信仰のゆえに、不信者の相手が離れていくなれば、そのままにいなさいというのが、パウロの勧めです。しばしば、それでも結婚を続けようとしています。それは、私がいなければ、彼女あるいは彼は救われないではないか？という救霊の思いです。けれども、自分がその人を救えるかどうか分からないのです。そもそも、神が救うのであり、自分がいなければその人が救われないと思うことはおこがましいですね。

こうした例は、いろいろあります。パウロがおそらくは、そうした代表例でしょう。今も正統派のユダヤ教徒で、誰かがキリストを信じたとなったら、そのため死んだものとみなし、葬式を挙げることもあるぐらいです。結婚し続けることは難しいでしょう。私がアメリカで学んでいた時に、元モルモン教の人がいました。彼は宣教に行くぐらいの、熱心なモルモン教徒でした。しかしイエスを信じて、救われたら、モルモン教徒の奥さんと別れることになりました。子どもとも離れます。ですから、私が彼と会った時は、独身でした。こうやって、信仰のゆえに相手が我慢ならずに出ていくのであれば、平和のためにそうしなさいとパウロは勧めています。

### 3A 召されたところに留まる勧め 17-24

このように、パウロが自分の意見を話している背後には、一定の考えがあります。「いろいろな状況に私たちは置かれているが、それは神がお許しになっていることであり、その中で神に従っていく。」ということです。結婚している者は離婚しないこと。結婚していない人は、独身のままがいいと私は願っている、とか。望ましい状況ではないと、キリスト者として感じていても、無理にその状況を変えようとして、かえって思い煩う必要はない。その状況の中で主に仕えればよい、という考えです。それを、「召されたところに留まっていなさい」という勧めで、パウロは話していきます。

### 1B 割礼： 神の命令への焦点 17-20

<sup>17</sup> ただ、それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態です。私はすべての教会に、そのように命じています。<sup>18</sup> 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくそうとはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。<sup>19</sup> 割礼は取るに足りないこと、無割礼も取るに足りないことです。重要なのは神の命令を守ることです。<sup>20</sup> それぞれ自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。

割礼の有る無しが、初代教会で大きな問題になっていたようです。二つの極端がありました。一つは、ユダヤ主義です。異邦人も割礼を受けて、モーセの慣習に従って、初めて神の国を相続できる、救われると言っていました。これに対してパウロが、恵みの福音にとって猛烈に反論しました。エルサレムでの会議がそれですし、ガラテヤ書を書きました。もう一つは、反動です。恵みの福音によって救われるのだから、割礼を受けていることは、信じる前の姿を見せるようでばつが悪い。そこで割礼の跡を消そうとする行為です。そういった外見のことは、取るに足りないパウロは言っています。割礼を受けているならそのまま、受けていないならそれもそのまま、神の命令に従いなさいと勧めています。

私がカルバリーチャペル・コスタメサのスクール・オブ・ミニストリー、牧会訓練校にいた時です。教会の事務所で、電話番号をしていました。祈りやカウンセリングを求めに来るんですね。私の牧師であり、学校の校長であるカール・ウェスタランドさんも電話番号をしていました。何か、電話先は、トランスジェンダーの人だったようです。話は、その人がイエス様を信じました。けれども、性転換の手術を既に受けました。男性が確か女性になったのだと思います。信仰を持ち、男に戻りたいと思ったのだと思います。それで、性転換手術を再び受けるべきかどうか、悩んでいたようです。カールさんの返答は、ここのみことばでした。「それぞれ自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」ということ。性転換をしてしまっても、神の命令をその状態で守っていくことの方が、よほど大事です。もし、再度、手術を受ける機会や余裕が与えられたらそうすればよいかもしれませんが、それよりも、もっと大事なことがたくさんあります。

## 2B 奴隷：主にある自由 21-24

<sup>21</sup> あなたが奴隷の状態で召されたのなら、そのことを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう。<sup>22</sup> 主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。<sup>23</sup> あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となっ**て**はいけません。<sup>24</sup> 兄弟たち、それぞれ召されたときのままの状態**で**、神の御前にいなさい。

割礼の有無の次に、奴隷の時にイエス様を信じた人々が、奴隷であることを恥づかしいと思っていたり、奴隷であれば、キリスト者の自由を十分に得ていないのではないかと**思**い悩んでいることがあったようです。ローマ社会は奴隷によって成り立っていたほど、その人口の多くが奴隷でした。そして、自分にとっては望ましくないことが数多くあったこと**で**しょう。

けれども、神の国は、社会変革を起こしたり、革命を起こすことによってもたらされるのではありません。私たちの主は、神の身分であられるのに、人となってしもべの姿を取られました。そこにある自由は、社会を変えることによるのではなく、人々がその望ましくない状況においても、心が一新されることによって得ていく自由です。そして結果的に、社会にも変化が与えられるという順番になっています。ちなみに、欧州の奴隷制度をいち早くやめたのは、英国、イギリスです。その廃止は、国会議員で熱心なキリスト者であった、ウィリアム・ウィルバーフォースによるものでした。あの、驚くべき恵みを作詞、作曲したジョン・ニュートンに指示を仰いでいた人です。

パウロにとって、その奴隷制度が正しいか否かと尋ねられたら、否と答えたこと**で**しょう。「もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう。」と言っています。ローマ社会の中で、自由の身になれる道、可能性はあったので、そのことを勧めています。自由になるに越したことはないのです。しかし、それよりも大事なことは、すでにキリスト**に**あって自由の身になっている**こ**とのほうです。そして、自由人であっても、実はキリストに属する奴隷になりました。社会的な身分は、キリスト**に**あってなかったのです。だから、奴隷のままでも大きな問題はないのです。

ただ、「人間の奴隷となっ**て**はいけません。」とも言っています。本当は、キリストにある自由を得ているのですが、その過酷な状況から、魂をも主人に吸い取られてしまうような、心が蝕まれるような状況になりがちです。そうであれば、キリストにある自由を守るために、自由になる機会があれば、なったほうが**い**いという助言であります。私も、牧会者、人々の魂を監督している立場として、このような状況にいたら心まで蝕まれると判断したら、その状況からなるべく出ることをお勧めします。けれども、パウロが言っているように、基本的な路線では、自分が救われた場がみこころの場であり、それがたとえ望ましくないと思われる状況でも、主にある自由を持つことができます。

#### **4A 未婚の人たち 25-35**

##### **1B 差し迫っている危機 25-28**

<sup>25</sup> 未婚の人たちについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べます。<sup>26</sup> 差し迫っている危機のゆえに、男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います。<sup>27</sup> あなたが妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません。妻と結ばれていないなら、妻を得ようとしてはいけません。<sup>28</sup> しかし、たとえあなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ未婚の女が結婚しても、罪を犯すわけではありません。ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのような目にあわせたくないのです。

未婚の人たちとあります。8 節では、結婚していない人や、やもめの人たちに話していましたが(8 節)、そこはもう適齢期を越えた人、十分に成人していて、その歳で結婚すべきかどうか、ということなのでしょう。その結婚していない人というのは、やもめと同じで、妻に先立たれた男なのかもしれません。けれどもこちらは、若者で、いわゆる結婚の適齢期に近づいている人々のこと、です。幼いころからのいいなずけで、かなり前から相手の人が決まっっていて、その間にいる人が結婚すべきかどうかを悩んでいる状況なのかもしれません。この人たちに対して、「そのままの状態であるのがよい」としています。すでに結婚していれば、そのままであるべきで、そうでなければ、結婚しないままのほうがよいという助言です。

その理由というのが、「結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。」ということであり、この「差し迫っている危機」というのが、当時のコリントの状況のことを指していると思われます。それが、午前礼拝で話したように、当時、度々起こっていた飢饉なのかもしれません。その中で、結婚をしてしまっっては、相手も自分もいろいろな意味で苦しみを通ってしまう、という老婆心からの心配なのかもしれません。婚約や結婚の約束をしている人々には、本当に結婚してよいのかどうか悩むことがあるでしょう。二人は相愛であり、本当に結婚したいけれども、例えば相手が癌にかかっているとすれば、本人から「あきらめて」と譲るかもしれません。今は個人的な苦難ですが、社会的な危機で結婚が苦難をもたらすと判断したのでしょう。

##### **2B 過ぎ去る世の有様 29-31**

<sup>29</sup> 兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。<sup>30</sup> 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。<sup>31</sup> 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。

パウロは、今の差し迫っている危機というものを考えていましたが、それだけでなく、その危機の背後にある終わりの予兆を考えていました。「時は短くなっています。」というのは、明らかに、主なるイエスが戻って来られることです。31 節に、その時には世の有様が過ぎ去るからだ、ということ

です。午前礼拝でお話ししましたように、何か危機的なことが起こる時、主は、世の終わりに起こることに注意喚起をなさいます。この世の有様は過ぎ去るのに、あなたがたは悔い改めなければ滅んでしまうという警告を行われました。

パウロが基本、「そのままいなさい」という立場を貫いているのはこのためです。主は、努めて狭い門から入りなさいと言われましたが、それは、信仰を保っていくことが終わりの日において、ますます困難になってくることです。そこで、結婚生活、喜びや泣くようなこと、何か大きな買い物をする事、こういったことには軽く付き合いなさいと勧めています。世の終わりが近づくにつれて、そういったものが揺らぎ、過ぎ去っていくような激変が多くなっていきます。それらの活動に関わってはいけないということではなく、それらが過ぎ去っていくとしても全く動じることのない、主との関係を深めていきなさいということです。そのような激変で、これらのことでほんろうされることが多くなり、主に対する信仰が揺らぐことも大いにあり得る、ということです。

### 3B 相手を喜ばず思い煩い 32-35

<sup>32</sup> あなたがたが思い煩わないように、と私は願います。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。<sup>33</sup> しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、<sup>34</sup> 心が分かれるのです。独身の女や未婚の女は、身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。<sup>35</sup> 私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。

パウロが、未婚の人が結婚しないほうが良いとする理由の三つ目です。それは、結婚によって、主に奉仕することから気が逸れてしまうということです。結婚のためのカウンセリングには、男と女がどれほど違うかを知ることのその一つです。男の人は女の人のことを知るのに、ものすごい労力と時間がかかりますし、女の人も同じです。男のことで言えば、主の働きに従事するにあたって、30分以内の身支度で外に出られるのに、妻が2時間もかかって遅れてしまうことがあるでしょう。女性であれば、自分一人でご飯を作ればものの30分なのに、夫がいるので、食事の準備、その後片付けがあつて、一日が過ぎていきます。二人の会話も、ちょっとしたことで誤解が生まれます。ものの数分で終わることが、何時間も話し合わないといけないかもしれません。そういった思い煩いから解放されるためにも、独身の男や女は、そのままいたほうがよい、という実際的なことを話します。

### 5A 婚約者と寡 36-40

#### 1B 婚約者 36-38

<sup>36</sup> ある人が、自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしていると思ったら、また、その婚約

者が婚期を過ぎようとしていて、結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。罪を犯すわけではありません。二人は結婚しなさい。

こちらは、先ほどの「未婚の人」よりも、より差し迫った状況、つまりもう結婚してもよい今期の真っ最中です。未婚の人と言われていたのが、幼い時にそれぞれの両親によって決められていた相手であるのに対して、こちらはもう十分に結婚してよい時期に来ているということです。「自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしている」というのは、他の人に心が引き寄せられてしまっている、性的にも誘惑を受けてしまっているということです。ユダヤ社会とは違って、ローマ社会は婚前交渉は当たり前、いろいろな性の関係を婚礼の前にもって普通でした。だから、キリスト者になっても、その誘惑があったのです。その時には、結婚しなさいとパウロは勧めています。

<sup>37</sup> しかし、心のうちに固く決意し、強いられてではなく、自分の思いを制して、婚約者をそのままにしておこうと自分の心で決意するなら、それは立派なふるまいです。

相手もその気がないようで、無理に結婚に持っていかなくてよいのなら、そのままにしていけるのがよいだろう。そういった誘惑も、心の内に強く決意していて、思いを制して独身のままでいられるなら、それは立派なことをしているということです。

<sup>38</sup> ですから、婚約者と結婚する人は良いことをしており、結婚しない人はもっと良いことをしているのです。

婚約者と結婚することによって、淫らな行いを避けることができます。けれども、結婚しないことによって、主の奉仕にもっぱら従事することができます。だから、もっと良いことをしています。

## 2B 寡 39-40

<sup>39</sup> 妻は、夫が活着ている間は夫に縛られています。しかし、夫が死んだら、自分が願う人と結婚する自由があります。ただし、主にある結婚に限ります。

最後に、やもめについてです。8 節ですでに言及していましたが、改めて、未婚の人に対する助言をしてきましたが、再婚について自由があることを確認するために書いています。夫が死んでしまった時、やもめになった時は、神の律法にもあるように、再婚する自由はあります。姦淫を犯すのではありません。しかし、主にある結婚、つまり信者との結婚であり、また、導かれた中での結婚です。

<sup>40</sup> しかし、そのままにしていられるなら、そのほうがもっと幸いです。これは私の意見ですが、私も神の御霊をいただいていると思います。

初婚の人と同じ助言ですね。再婚していいけれども、そのままにいるほうが幸せだということです。以上ですが、パウロは、これらは、主からの命令ではなく、あくまでも自分の意見だと言っています。自分の意見だけでも、自分も神の御霊をいただいているので、御霊によるものであると願うということを行っています。

こういったところからは、原則をくみ取るのが大事ですね。パウロの具体的な助言は、主からの直接の命令ではないので、いろいろ変わっても大丈夫です。けれども、結婚について、その背後にある考えは、結婚や仕事、割礼など自分の体のこと、いろんなことがあります。そういったことが、思い煩いにならないようにすること。主の御手に任せること。いろいろ変わることに、関わりすぎないこと。望ましい状況でなくとも、主がそこに自分を置いてくださっていること。主を喜ばすことをするために、これらのことに振る舞わされて、思い煩うことがないようにすること、軽い付き合いでいく、ということです。しかし、結婚自体は良いことであり、男女に与えられた性の結びつきは神に祝福されるものであるので、結婚する人はしなさいという、ことです。

話題はずれますが、教会について、相談を受けることがあります。他の教会で人間関係などで悩んでいて、けれども人付き合いをしないといけないからといって悩んでいる人には、いつもこう質問します。「そこで、イエス様を思いっきり礼拝できますか？」イエス様を礼拝するのに自由を持っていることが最も大事であり、その他のことも大事だけれども、二の次にしていることの大切さを伝えたいからです。いつの間にか思い煩っていて、人の気持ちを害したくないということが、イエス様を自分が喜んでいることよりも優先していることがあります。同じように、結婚もそうですし、仕事もそうです。自分のこだわりを捨てて、主に任せていく。これこそが、最も大切なことだと知ることです。